## 5月8日のメッセージ

聖書:ヨハネによる福音書 13: 31-35

## 「互いに愛し合いなさい」

「子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。」(ヨハネによる福音書 13:33)

この言葉は過越の祭の夜、弟子たちの足を洗われた後、イエスが語ったものです。直接的には十字架の出来事を指しています。けれども、イエスが復活されたことを知っている今、この言葉を聞くと、この後に待ち受ける昇天を思わせる言葉にも聞こえてきます。

「イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。」(使徒言行録 1:3)

復活されたイエスは、弟子たちに本当に多くのことを伝えられたことでしょう。繰り返し教えられた中に、今日のこの言葉、「互いに愛し合いなさい」(ヨハネによる福音書 13:34)は確実に含まれていたことでしょう。

「他者を愛する」ことの大切さは、聖書が繰り返し教えていることでもあります。実際、イエス自身、あらゆる掟の中で最も大切なものは何かと問われた際(マルコによる福音書 12:28)には、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」(マルコによる福音書 12:30、申命記 6:4-5)、また、「隣人を自分のように愛しなさい。」(マルコによる福音書 12:31、レビ記 19:18)と答えられています。

愛することの大切さはわかっています。しかし、どうしたらよいかがわからないから困っているのではないでしょうか。

「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」(マタイによる福音書 7:12) と言われているからと行ったことが裏目に出ることもあります。 反対に、ひたすら愛を求めて相手を困らせることもあるでしょう。

ここで大切なのは「わたしがあなたがたを愛したように」(ヨハネによる福音書 13:34)という言葉です。イエスはどのように弟子たちを愛されたでしょうか。文字通り、身を挺して命の道へと連れ戻されたのではなかったでしょうか。だから、ヨハネの手紙一は「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。」(ヨハネの手紙一 4:19)と言い表すのです。

イエスは常に相手のことを思って行動されました。相手の目線に立って歩まれました。時に、自分を利用しようとする者さえも正しい道へと導かれました。

私たちもまた、良い羊飼いに守られ、導かれている一人のはずです。だとするならば、神が私たちに注ぎ続けてくださっている愛を、隣人へと注いでいく。「自分さえ良ければ」から抜け出して、相手を思って行動する。これが「互いに愛し合いなさい」(ヨハネによる福音書 13:34)との掟に応えていくことになるでしょう。私を守り、支え、導いてくださる神をたたえることになるはずです(「どのようなときも、わたしは主をたたえ/わたしの口は絶える

ことなく賛美を歌う。」詩編 34:2)。

改めて言うまでもなく、私たち一人ひとりに今、この時も神の愛は豊かに注ぎ続けられています。一人その事実を喜ぶのではなく、隣人と共に喜ぶ(「わたしと共に主をたたえよ。ひとつになって御名をあがめよう。」詩編34:4)。その輪がますます大きく、豊かに広がっていくことを、イエスは、そして神は今日も願われているのです。

